

ほんとに危ないの？中国食品？

BY DALIAN OFFICE

日本では、中国から輸入された食品の有害物質残留等に関する報道が相次ぎ、中国産の食品は疑いのまなざしで見られています。こうした状況の中で考えるのは、中国国内での食品安全は大丈夫なのだろうか？ということです。そこで、今回は中国国内での食品の安全について調査してみました。



1. 中国での食品事情

中国では野菜を買ってきて調理する際、まず流水で洗い、その後しばらく水に漬けておくように言われることがあります。野菜に付着している農薬を洗い流すためですが、野菜を洗うための洗剤も売られています。また、飲食店で使う油の使い回しや、廃油から食用ラードが作られていた事件などが度々ニュースになります。

こうしたことからみると、やはり「中国の食品は危ない！」ということになりますが、以前のように隠蔽されずにニュースになるということは中国でも大きな問題として捉えられ、改善が進みつつあるといえるのではないのでしょうか。

2. 安全な食品提供への取組

中国内外でこのように食品の安全性が問題になる背景は、

- ① 中小企業の乱立や競争激化による商業道德の欠如
- ② 過剰な低価格の追求
- ③ 格差拡大による金銭至上主義の蔓延
- ④ 監督部署の不足

などがあげられます。

中国の食品監督当局によると、中国の食品加工企業の78.7%が従業員10人以下の零細企業です。これまでも中国の行政が監督を怠っていたわけではなく、抜き打ちでの製品検査を実施しており、最近、遼寧省で行なわれた乳製品検査の合格率は85.7%でした。また、海外で高まっている中国製品を危険視する動きに対応するため、中国政府は呉儀副首相をリーダーとする特別対策班を設置し、乱立する業界や企業の整理を行い、併せて監督管理の強化を図ろうとしています。

3. ブランド農産物の広がり

生産者側も消費者の安全意識の高まりに対応するため、安全を強調した食品を生産する

ようになってきています。それが「緑色食品」、「無公害農産物」、「有機農産物」といった「ブランド農産物」です。

中でも「緑色食品」は一定の生産基準に基づき生産される政府認定の食品であり、安全、優良、健康によい食品として広がりを見せています。この制度は1992年に導入され、2006年末段階で全国4,615の企業、12,868品目の製品が「緑色食品」のマーク使用が許可されており、食品安全に対する関心の高まりを表すように、その認証企業・製品の登録数は、大幅に増加しています。

「環境のためなら10%高い製品を買いますか」
(単位：%)

国・地域	強く賛成	賛成	強く反対
インド	51	42	2
中国	38	55	1
フィリピン	44	46	1
インドネシア	41	47	1
マレーシア	28	55	3
タイ	26	56	1
韓国	22	58	2
シンガポール	15	55	3
香港	15	54	4
日本	10	54	3
ニュージーランド	15	38	13

■出所：グレイ・グループ



「緑色食品」の表示のある牛乳

「緑色食品」は、生産する農地や空気・水の検査・監督から始まり、生産過程の農薬種類や使用回数・間隔なども厳しく管理されます。また、記録整備も必要なため、問題が発生した際にはすぐに原因が分かるようになっています。

大連市にも、市民への基本的な安全を保障する目的で緑色食品発展センターが設置されており、農産物の監視を行なっています。同センターの話によれば、これまでは確かに安全に対する対策が採られていなかった面はあるが、現在では問題に対し適宜対応しており、状況はかなり良くなってきているとのことでした。緑色食品は大手スーパー等で販売されていますが、やはり価格は一般の食品に比べると高く、例えば、一般のキャベツ(500g)が1.5元(約23円)、「緑色食品」と表示のあるものが4.5元(約68円)、レタスでは一般に3元(約45円)のものが8元(約120円)と大きな価格差があります。環境のために高い製品を買うかという意識調査で中国は上位に位置しますが、この価格差は決して小さくないことから、購入する人は比較的生活に余裕のある層に限られています。

4. 食品製造加工業者の取組

日本へ輸出している中国の食品加工業者にも、安全についてお話を聞いてみました。当社は日本向けに輸出することを前提に作られた工場であるため、食品の安全性の点では、工場設計から中国国内向け工場と仕様が異なるようです。実際、製品加工の現場はもちろ

ん、事務棟についても清潔にされており、靴の履き替えやトイレの洗浄管理など日本にいるような衛生管理が行き届いていました。事務棟でも厳しい衛生管理を行なっているのは、従業員の衛生観念を育てるためとのこと。また、この輸出用工場は、日本では制約があり導入が難しいことでも取り入れが可能であり、日本の工場よりも進んだ衛生対策が採られている面もあるそうです。



無公害農産品の生産基地を示す看板



野菜売場に設置された産地表示機
(バーコードをかざすと生産者が表示される)



無公害野菜専用と表示されたスーパーの売り場

5. 最後に

主に中国国内向け野菜について述べてきましたが、中国国務院の発表によれば、世界の野菜需要の49%を中国産野菜が占めており、そのうち9割は農薬・化学肥料の使用に制限を設けた绿色食品などの「ブランド農産物」だということです。また、厚生労働省の輸入食品の抜き取り検査では、EUやアメリカの合格率よりも中国食品の合格率が高かったというデータもあります。その他、中国の有機食品用農地面積は世界第2位となっており、中国が安全な食品提供に向けて大きく努力していることが窺えます。

中国側からは、日本の基準は厳しすぎるという声が多く聞かれます。ただ閩雲に安全基準を厳しくし農薬を制限しすぎれば、人手がかかり大量生産できなくなることにもなりかねません。日本は既に製品供給の面では中国に頼らざるを得ない状況にあるため、単に危険視しているだけでは、日本で賄えるものしか入手できない事態になる恐れもあります。両国で対話をしながら、両者ともメリットのある関係を作っていくことを考える段階にきているのではないのでしょうか。

(大連駐在員事務所 児島 尚三)